

38 PMD患者の生活指導における遊びについて (人間関係からみた集団構造についての一考察)

国立徳島療養所

中西 誠 早田 正則
川合 恒雄

子供の人格形成における遊びの占める割合は大きいとされているが、PMD患者はその身体的障害ゆえに非常に狭い生活空間を余儀なくされている。その遊びも屋外遊びが容易にできない。既製の玩具では使用不可能なものが多い等、多大の制約を受けている。ところが彼らなりにその現実に促した遊びを行なっているものと思われる。そこで彼らの遊びと人格形成および障害の進行との関係を探り、今後の生活指導の一助としたい。

今回は遊びの種類と年齢、障害度との関係を自然観察法により、昭和52年3月より12月までの間、18時から20時までの余暇時間に調査した。

これによると、遊びの種類が少なく、テレビ、レコード、マンガといった消極的で受身の遊びが多いことがわかる。また、年齢別にみると、7才から12才でミニカー、おもちゃ、12才から15才でプラモデル、13才から16才では野球、読書に区別される。障害度別にみた場合では、特に特徴がみられなかった。しかし、ベッド上、車椅子に乗っている時、独歩の時といった生活状態でみた場合には、ベッド上ではテレビ、読書、レコード、マンガ、プラモデルであり、車椅子では野球、2～3人でする既製ミニゲームであり、独歩では野球、プラモデル、ミニゲームというように区別が可能と思われる。

次に人間関係がどのように成り立っているかという集団構造をみる為にソシオメトリックテストを実施した。質問の内容は具体的な事例である必要があり、また実現可能なものがよい為に、「あなたはベッド換えをするとしたら、誰のとなりにはなりたくないですか」、および「あなたは何をして遊びたいですか。そのとき、誰と遊びますか。誰とは遊びたくないですか」という質問紙を別に作成し、28名(女3名)について実施した。(ただし、この質問の場合、選択者数は制限なしとし、文字が書けない者については研究者が代筆した)。これによると指向人数4以上の者が4名で、誰にも指向されなかった者が5名いた。また、拒向者が1名だけというのは14名と多く、集団の結びつきが非常に弱いことがうかがわれる。次に「ソシオグラムをマトリックスにより集計すると、集団の結びつきの強さをみる集団凝集力が0.03と低く、社会的知位指数も非常に低いことがわかる。特に社会測定的地位得点ゼロ以下の者が28名中10名みられ、これらの患者の人間関係における指導を特に留意しなければならないと思われる。次に前回対象にしたうちの5名が52年3月の病棟換え後どのような人間関係をつくっているのかを同様な方法で調査し

た。それによると、この5人の関係は相互選択により、深く互いに指向されている。ところがその反面、新しい仲間との関係が9ヶ月後現在において浅いように思われる。

以上のようにソシオメトリックテストを通して集団構造をみたのですが、問題点として、孤立者が多いことがあげられる。又、集団の結びつきが一般にくらべ非常に弱いと思われる。その要因としては、年齢差が大きい、日常生活状態の相違、余暇時間が少ないなど様々な要因が考えられるが、今後これらの問題についてさらに検討していきたい。

39 PMD低IQ児に音楽療法を試みて (そのⅡ)

国立療養所西別府病院

吉良陽子 寺田真弓

〔目的〕

私達は昨年度より、筋ジスであり、かつまた知恵遅れであるPMD低IQ児の問題行動について、音楽による心理療法によってどのように変化していくかという課題にとりくんできた。

昨年度の音楽療法の場合への適応を旨としたのに続いて本年度は、音楽による自己表現力の養成さらに実際の病棟における生活場面での変化を期待した。対象児は表Ⅱのごとく4人である。

〔方法〕

4人を一室に集め、彼らの興味を示す曲、即ち童謡、日頃聞きなれた流行歌、リズムカルな曲などをくり返しかける。その際、音楽に対し注意を向けるよう一緒にリズムをとったりなどして働きかけをする。また音楽表現が出やすいように楽器を与えたりなどして援助し情緒的反応をひき出す。同時にチェックリスト(表Ⅰ)を作成し、療法中や病棟内での様子について観察をした。

〔結果〕

好きな曲を与えるうちに重度の知恵遅れの2人は曲にあわせて歌ったり、体でリズムをとったりして

表Ⅰ チェックリスト

目の表情	
顔の表情	
手の位置	
姿勢	
会話	
緊張	
快感	
嫌悪	
興奮	
喜悅のしるし	

(音楽療法前後の行動・状態)

- ・平穩、興奮
- ・他児との関係
- ・職員との関係

年 月 日患児名

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

子供の人格形成における遊びの占める割合は大きいとされているが、PMD 患者はその身体的障害ゆえに非常に狭い生活空間を余儀なくされている。その遊びも屋外遊びが容易にできない。既製の遊具では使用不可能なものが多い等、多大の制約を受けている。ところが彼らなりにその現実に促した遊びを行なっているものと思われる。そこで彼らの遊びと人格形成および障害の進行との関係を探り、今後の生活指導の一助としたい。